

生涯学習をめぐる市民意識の分析(2)

古野有隣

はじめに

本稿は、金沢市民を対象として実施した調査結果の第二次報告である。調査は「平成元年金沢市民意識調査」として、金沢市企画調整部調査統計課により、平成元年7月に実施された。(ただし、この調査には生涯学習以外のテーマも含まれているが、ここでは、生涯学習についての部分のみを対象としている。)生涯学習の部分に関しての調査内容の検討および結果の分析については、筆者を代表者とする「金沢市生涯学習行政研究会」が金沢市教育委員会からの委託を受けてその作業をおこない、結果分析の一部については、「金沢市生涯学習研究調査報告書」として平成2年3月に発表した。

これをうけて、そのさい未使用のデータを中心にして、あらたな分析を試みようとするのが本稿の意図である。ただし、構成上若干の重複があることをお断わりしておきたい。

(1) 調査の概要

前記した如く、この調査は金沢市調査統計課の「金沢市民意識調査」として行われたものであるが、その概要は以下の通りである

1) 調査の対象

平成元年7月1日現在、20才以上の市内在住者から2%を無作為抽出したものであるが、対象者数、有効回答者数、回収率は次の通りである。

対象者数	男	2,824人
	女	3,358人
	合計	6,182人
回答者数	男	1,151人

	女	1,466人
合計		2,617人
回収率	男	40.8%
	女	43.7%
	全体	42.3%

2) 調査の方法

郵送法による配布および回収

3) 調査の内容

回答者自身の属性的事項のほか、生涯教育ないしは生涯学習の認知度、生涯学習の必要感とその活動実態、および今後への期待感などである。

(2) 調査結果の分析

1) 属性の観点から

まずはじめに、対象者自身の属性という点から調査結果を考察することとしたい。生涯教育ないしは生涯学習という言葉の認知度は男84.4%、女77.6%である。また、学習をしたいと思っている比率は男90.4%、女88.8%となっている。ともにその差は大きくはないが、いずれの場合も、男の比率が上回っているところをみると、予想に反して男のほうが生涯学習への関心は強いといえるのかもしれない。

学習をしたい(仕事や日常生活に必要なことを学んだり、スポーツや芸術に親しみたいという意味)と思う理由としては、男女とも知識・教養をたかめ趣味を豊かにするためと自由時間・老後の人生にそなえるための2つが双璧となっているが、前者は男、後者は女

のウェイトがやや強い。男女のあいだで、やや差の見られるものをさがすと、健康・体力づくりは男、親睦や友人づくりは女の人の関心がやや強いことである。

では、実際にここ一年ぐらいのあいだに学習したという人の比率になると、男41.0%にたいして女50.4%である。このことは男の場合は学習意欲はあっても、それを妨げる条件が多くあることを示しているものといえるのかもしれない。

学習した分野を見てみると、男女のあいだでかなり異なった傾向が見られる。すなわち、男の場合は職業関係、趣味、スポーツがベスト・スリーであるのにたいして、女の場合は趣味、家庭、スポーツである。しかも、前者では3者の比率があまり差が見られないのに比して、後者すなわち女の人にとっては、趣味の比率が他の2つより圧倒的に高くなっている。

次に、学習をおこなった場所についてであるが、男の場合は本、テレビなどでの独学が30%をこえてトップであるのにたいして、女では、10%そこそこである。女のトップはカルチャーセンターであるが、この場合の男の比率はたいへん低くなっている。その他では、地域や職場のサークルは男、市や公民館の講座は女の比率が高くなっている(いずれも20%程度)ことが目につく。(表-1)

市や公民館の講座などが利用されている度合いはかならずしも高くはないようであるがその理由はどこにあるのだろうか。開設の時期が不適當、内容が不満、情報がなかったと

いう3つが、男女ともこの順位でベスト・スリーにあげられている。今後検討を必要とする問題であろう。このほか、集団学習が好きでないという人が男のなかにやや多いことやそこに参加した人が持った不満感のなかに、時間的事と、内容に関してのことが多かったことなどが目立っている。

最後に、それぞれの人が今後の学習や活動のために何を期待しているのかを見ることにする。男女とも、公立の社会教育・文化施設の充実を求める声が60%を越えている。そして具体的には、男では体育施設、女では公民館と体育施設への要求が強い。男女による差としては、既存施設間の連携でのサービスの充実、民間教育事業の振興、団体活動の活性化は男、公民館の講座の充実は女のほうが相対的に高い比率を示している。

2) 年令の観点から

調査結果の分析の第二の観点は年令からのものである。生涯教育ないしは生涯学習という言葉の認知度は30才代から50才代に高く、20才代と60才以上ではいくらか低くなっている。しかし、学習をしたいと思っている人の比率になると、20から40代の層が高いというギャップが見られる。

学習をしたいと思う理由としては、20代と30代では知識・教養・趣味を、40才代~60才代にかけては、自由時間・老後への備えをあげている比率が比較的高い。(表-2)

この1年間に学習したことがある人の比率

表-1 学習内容・学習機関の性別分布

学習内容 性別	職 業	家庭生活	教 養	芸術・趣味	健 康	スポーツ	そ の 他
男	42.2	2.8	35.2	33.3	15.9	31.4	4.2
女	15.8	28.6	21.7	56.0	14.2	27.7	3.7

学習機関 性別	市・公民館	国・県	民 間	サークル	各種学校	公開講座	放送講座	本・テレビ	そ の 他
男	14.4	5.7	13.1	19.5	1.5	1.1	8.7	30.5	5.3
女	23.5	5.1	28.8	13.0	2.0	0.5	4.9	12.6	9.2

としては、20才代および60才以上の場合がその中間層よりもいくらか高く、働きざかりの人が学習することの難しさをしめしているようにも思われる。

では学習した分野はどうであろうか。目につくことの1つは60才を境にして傾向が変化するので、職業の分野は比率がさがり、教養と趣味の分野はあがっている。もう1つは年代による差があまり見られないもので、家庭関連の分野がそれである。(表-3)

学習した機関(場所)としては、20才代か

ら40才代まではカルチャーセンターがトップであり、50才代から上の世代では公民館がトップという対照が見られる。本やテレビでの独学の場合も、上の世代の比率が下の世代を上回っている。各種学校・専修学校や大学等の公開講座で学習したという人はどの世代でも少ないようである。また、カルチャーセンターと地域や職場のサークル活動の場合には60才以上では大きく比率が下がるという特長が見られる。(表-4)

全体をとうして比率の高い4機関について

表-2 年代別・学習理由

年代	理由	知識・教養	親睦・友人	日常生活	転職・就職	余暇・老後	体力づくり	その他	理由なし
20才代		63.6	41.5	14.4	11.2	36.2	14.9	1.3	0.5
30 "		58.6	32.3	17.3	7.4	48.6	18.7	-	1.4
40 "		50.9	32.2	14.7	5.0	56.2	24.0	0.4	1.7
50 "		50.2	32.7	16.1	3.3	56.6	25.1	0.2	1.9
60 "		53.1	35.3	16.6	0.6	55.2	26.7	0.6	0.9
70才~		53.8	35.4	12.8	0.5	49.2	25.6	1.0	4.1

表-3 年代別・学習分野

年代	分野	職業	家庭	教養	芸術・趣味	健康	スポーツ	その他
20才代		33.8	15.4	20.9	42.8	9.5	34.8	4.0
30 "		32.9	19.4	22.7	36.1	9.7	35.6	1.9
40 "		29.4	16.5	19.6	40.0	7.5	37.6	4.3
50 "		25.5	25.0	28.8	52.4	14.4	21.6	5.8
60 "		17.6	18.5	30.7	62.0	24.4	20.0	3.9
70才~		10.3	15.1	49.2	54.8	32.5	19.0	3.2

表-4 年代別・学習機関

年代	学習機関	市・公民館	国・県	民間	サークル	各種学校	公開講座	放送講座	本・テレビ	その他
20才代		9.5	4.0	31.8	18.4	5.0	0.5	6.0	16.4	8.5
30 "		13.4	5.1	24.1	16.7	2.8	-	10.2	17.1	10.6
40 "		15.7	6.3	27.1	20.0	1.2	1.2	5.9	14.9	7.8
50 "		22.1	5.8	22.6	14.9	-	1.0	5.3	21.2	6.7
60 "		28.3	5.9	15.1	10.7	1.5	0.5	5.9	26.3	5.4
70才~		39.7	4.8	9.5	8.7	-	1.6	4.0	24.6	6.3

性別の傾向をだしてみると、カルチャーセンターと公民館の講座の場合は全年代を通して女の比率が男のそれをうまわっており、本やテレビでの独学とサークル活動では、全くそれとは逆の傾向となっている。

公民館の講座を学習した場所としてあげた人は全体の20%であるが、その他の人の意見を調べてみると20代では情報不到達が、30から60代までは時間・時期がもっとも大きい理由となっているようである。また、集団学習を好まない人の比率が40代から上の層で高いのも目につく傾向である。(表-5)

今後どのような方向での充実を期待しているかを聞いて見ると、どの世代でも公立施設をあげる比率がきわめて高い。公民館による講座の充実を求める声もかなり強いことと合わせると、行政に寄せる市民の願いにいかに応えていくかが問われているものとうけとめるべきであろう。公立施設の種類としては、20代では男女とも70%弱が体育施設をあげ、30代40代でも比率は下がるが第一位をしめている。これにかわって50代から上になると地区公民館の充実を求める声が強くなっている。そして、この声は女のほうが男よりも強い。

公民館に関連して1つの顕著な傾向がみとめられる。それは、中央公民館の充実を求め比率が男女とも50代以下できわめて低いこと、また、20代では地区公民館への比率も相対的にたいへん低いことである。

地区ならびに居住年数の点からの考察に入るにさきだって、以下の分析に記す特長をつくりだす背景を理解しておくために、それぞれの層の特長を眺めておくこととしたい。

まず地区ごとの性別構成であるが、相対的に女が多いのが西部・港周辺および山間の3地区であり、南部・駅西および北部では男の比率が高い。その他の地区では全体の比率とほぼおなじ分布となっている。(表-6)

年齢構成の特長としては次のごときことが見出される。

中央地区は40才代までの人口が少なく、逆に70才以上の比率がきわめて高い。南部近郊は、70才以上の比率がきわめて高い。南部近郊は、70才以上が少ない。西部は30代40代が多く50代から上が少ない。駅西は20代と30代は多いが、40~60代は少ない。北部近郊は20代と30代が少ない。山間部では20~30代のところが少なくなっている。(表-7)

表-5 年代別・非参加理由(市・公民館)

年代	理由	情報非入手	時間・時期	開催場所	期待のものが無い	希望と合わない	興味がない	集団学習きらい	その他
20才代		40.1	36.7	14.1	30.5	20.3	9.0	8.5	9.6
30 "		24.7	47.3	17.6	25.3	21.4	4.9	9.3	12.6
40 "		24.1	42.4	24.6	30.0	15.3	3.9	13.3	10.3
50 "		21.8	42.2	22.4	32.7	25.2	4.1	15.0	6.8
60 "		20.7	33.3	23.7	26.7	21.5	8.1	22.2	9.6
70才~		17.5	27.0	20.6	28.6	11.1	7.9	20.6	20.6

表-6 性別・居住地区

性	地区	中央	東部	南部	南部近郊	西部	港周辺	駅西	北部近郊	北部	山間	計
男		7.9	16.8	12.9	16.2	11.2	11.7	4.2	8.9	5.2	5.0	100.0
女		8.2	17.2	15.1	15.9	10.1	10.0	4.6	8.9	5.8	4.2	100.0
全体		8.1	16.9	14.2	16.0	10.6	10.8	4.4	8.9	5.5	4.6	100.0

職業との関係を見ると次のようである。まず中央地区では自営業の人が多いのに対して、サラリーマンが少ない。東部地区は無職（主婦をふくむ）が多い。南部近郊には自営業が少ない。西部・港周辺・北部近郊の3地区にはサラリーマンが多い。そのうち西部を除く2地区では無職が少ない。また山間部でも無職が少ない。（表－8）

居住年数に関しては、中央・北部・山間の3地区で30年以上の人が多いのに対して、南部近郊と西部では少ないこと、そして、5年

未満という人が多いのは西部、少ないのは中央・北部近郊・山間である。（表－9）

（3） 地区別及び居住年数による分析

生涯教育ないしは生涯学習の認知度の高いのは、北部・中央・南部近郊・東部及び南部の各地区であり、居住年数としては10年以下の比較的短い人のなかに多い。また、学習をしたいとおもっている人の多い地区は上記のうち中央を除いた地区と港周辺であり、年数は10年以下の人である。

表－7 年代別・居住地区

年代	地区	中央	東部	南部	南部近郊	西部	港周辺	駅西	北部近郊	北部	山間
20才代		4.2	20.9	10.4	18.6	11.6	11.4	6.4	6.9	5.4	4.2
30 "		6.7	14.8	14.8	18.5	12.9	10.5	6.1	7.4	4.9	3.4
40 "		5.5	14.6	13.9	16.6	12.7	11.3	3.2	11.5	5.8	4.9
50 "		10.8	15.6	16.1	15.6	8.8	10.6	3.3	9.2	4.0	6.0
60 "		10.2	19.5	14.4	13.7	8.1	11.4	3.0	8.4	6.6	4.6
70才～		14.6	19.2	15.4	9.8	6.5	8.5	4.9	9.3	7.7	4.1

表－8 居住地区別・職業構成

職業	地区	中央	東部	南部	南部近郊	西部	港周辺	駅西	北部近郊	北部	山間
自営業		24.2	10.1	12.9	6.7	11.2	16.3	13.8	15.1	15.2	16.7
会社・団体の役員		8.1	5.4	5.7	6.2	8.3	9.6	8.6	3.9	8.3	8.3
民間勤務		20.9	24.1	23.7	31.7	33.9	33.3	27.6	34.9	22.8	30.0
公務員・公社員		7.6	9.9	12.7	11.9	9.0	6.0	10.3	9.9	9.0	11.7
無職（主婦含む）		37.3	43.5	43.9	40.2	36.5	33.0	38.0	34.9	42.6	31.6
学生		1.9	7.0	1.1	3.3	1.1	1.8	1.7	1.3	2.1	1.7
計		100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

表－9 居住地区別・居住年数

居住年数	地区	中央	東部	南部	南部近郊	西部	港周辺	駅西	北部近郊	北部	山間
5年未満		4.7	12.8	15.1	11.5	10.8	5.7	12.9	2.6	9.7	1.7
5～10年		4.3	5.6	5.9	5.3	9.0	7.1	5.2	5.2	5.5	4.2
10～20年		9.5	8.6	11.3	17.2	14.4	12.8	13.8	13.8	6.9	13.3
20～30年		10.0	16.2	14.6	20.3	18.1	20.2	18.1	21.6	14.5	16.7
30年以上		71.6	56.8	53.1	45.8	47.7	54.3	50.0	56.9	63.4	64.2

これを見ると認知度と意欲のあいだには、いくらかの関連があるようにもみうけられそうである。(表-10)

それではこの1年間に実際になんらかの学習をしたという人の比率を見ると地区による差がいくらかあるようである。すなわち、もっとも高い比率を示したのは南部で52.5%、低いのは駅西の36.2%である。四捨五入で50%

表-10 居住地区別・年数別・認知度

居住地区	認知度		学習意欲	
	あり	なし	あり	なし
中 央	82.0	18.0	88.6	7.6
東 部	86.0	14.0	91.4	5.9
南 部	82.2	17.8	90.3	6.5
南部近郊	83.8	16.2	92.4	4.5
西 部	73.6	16.4	86.6	8.3
港 周 辺	76.2	23.8	89.0	6.0
駅 西	70.7	29.3	81.9	12.9
北部近郊	77.2	22.8	88.8	6.0
北 部	85.5	14.5	93.1	2.8
山 間	79.2	20.8	83.3	11.7
5年未満	83.5	16.5	94.1	3.1
5～10年	86.4	13.6	93.5	3.9
10～20年	81.1	18.9	91.0	5.0
20～30年	80.5	19.5	92.7	3.3
30年以上	79.5	20.5	86.9	8.8

の範囲にはいる地区には中央、南部、東部、北部があり、他の地区はいずれも40%の範囲内となっている。ここでも、前者、つまり学習率の高い地区が認知度の高かった地区と一致していることが注目される。

学習した分野としては、どこの地区でも、芸術・文化・趣味関連が第一位であることは共通の傾向であるが、第二位になりに入っているかによって3つのグループになる。1つはスポーツが第二位となっているもので、地区としては南部、南部近郊、西部、北部近郊2つめのグループは職業関連を第二位としているところで、港、駅西、山間の3地区、そして最後のグループは教養関連を第二位にしているもので、中央、東部、北部である。

その他目につく傾向としては、山間部で家庭生活関連の比率が低いこと、駅西地区での教養および健康の比率が低いことなどがある。(表-11)

同様のことを居住年数の面からながめて見よう。学習をしたという比率がもっとも高いのは20年～30年の人で、5～10年の人の場合がもっとも低い。また、分野としては趣味関連が第一位であることが共通しているが、比率としては年数のあがるにつれて高くなっている。5年未満の層では健康及びスポーツの

表-11 居住地区別・学習分野

学習分野 居住地区	職 業	家 庭	教 養	芸術・趣味	健 康	スポーツ	そ の 他
中 央	26.6	15.6	29.4	49.5	11.9	26.6	5.5
東 部	24.6	20.9	33.2	50.2	14.2	28.4	3.8
南 部	25.5	20.1	26.6	44.0	14.1	31.5	2.7
南部近郊	23.6	19.5	26.8	46.4	16.4	30.5	2.3
西 部	24.8	17.7	22.1	41.6	13.3	36.3	7.1
港 周 辺	30.0	18.3	24.2	50.8	16.7	28.3	3.3
駅 西	31.0	16.7	14.3	45.2	2.4	26.2	4.8
北部近郊	28.9	14.4	27.8	51.5	16.5	29.9	2.1
北 部	20.6	23.5	27.9	38.2	20.6	19.1	7.4
山 間	36.2	8.5	21.3	53.2	19.1	23.4	4.3

率が相対的に低いのが特長的である。(表-12)

学習の機関(場所)としてどこをえらんだかを見てみよう。カルチャーセンターをあげた比率が第一位であるのは中央、東部、南部、南部近郊、西部、駅西の5地区、本やテレビの独学が第一位なのは港と北部の2地区、そして北部近郊は公民館の講座、山間部ではグループ活動が第一位を占めている。カルチャーセンターは港と北部で第二位、公民館は、中

央、東部、南部、南部近郊、港、駅西の6地区で第二位であるが、北部近郊と山間では前者、西部、北部、山間では後者の率が低い。

(表-13)

居住年数との関係を見ると、30年以上の層を除くといずれでもカルチャーセンターが第一位であるが、比率を見ると、20年以下の層の場合にウエイトが強いといえそうである。

(表-14)

表-12 居住年数別・学習分野

学習分野 居住年数	職 業	家 庭	教 養	芸術・趣味	健 康	スポーツ	そ の 他
5年未満	27.6	20.7	26.7	34.5	6.0	26.7	4.3
5～10年	28.3	11.7	30.0	40.0	13.3	35.0	1.7
10～20年	26.6	21.7	22.4	44.8	14.0	37.8	1.4
20～30年	31.0	14.2	22.2	45.6	11.3	31.4	4.2
30年以上	23.7	19.6	29.4	51.1	18.1	26.3	4.4

表-13 居住地区別・学習機関

学習機関 居住地区	市・公民館	国・県	民 間	サークル	各種学校	公開講座	放送講座	本・テレビ	そ の 他
中 央	20.2	7.3	22.0	20.2	1.8	0.9	1.8	19.3	6.4
東 部	21.3	6.2	21.8	13.3	0.9	0.5	8.1	19.4	8.1
南 部	22.8	3.8	25.0	15.8	1.1	0.5	3.3	21.2	6.5
南部近郊	20.0	5.0	25.9	11.4	2.3	0.9	6.4	17.7	10.0
西 部	15.9	6.2	24.8	12.4	2.7	1.8	8.8	17.7	9.7
港 周 辺	20.8	4.2	20.8	17.5	4.2	0.8	7.5	22.5	1.7
駅 西	16.7	7.1	28.6	9.5	—	—	14.3	16.7	7.1
北部近郊	21.6	5.2	17.5	20.6	2.1	—	4.1	19.6	8.2
北 部	16.2	2.9	20.6	16.2	1.5	1.5	7.4	23.5	10.3
山 間	14.9	8.5	12.8	29.8	—	—	8.5	17.0	8.5

表-14 居住年数別・学習機関

学習機関 居住年数	市・公民館	国・県	民 間	サークル	各種学校	公開講座	放送講座	本・テレビ	そ の 他
5年未満	14.7	3.4	26.7	18.1	4.3	—	6.9	19.8	6.0
5～10年	16.7	5.0	26.7	20.0	1.7	—	5.0	16.7	8.3
10～20年	18.9	4.9	27.3	14.7	2.8	1.4	7.7	10.5	11.9
20～30年	14.6	4.2	24.3	18.8	2.5	0.8	5.9	18.8	9.6
30年以上	23.4	6.3	20.1	13.6	0.9	0.8	6.3	22.1	6.3

次に、市や公民館の講座以外の機会を選んだ人の理由をみてみよう。駅西および北部近郊の2地区以外のすべての地区で時間・時期が第一位で40%内外の比率となっている。駅西では情報関係、北部近郊では内容の面がもっとも多くあげられている。全体のなかでやや目立つ傾向をしめしている1つは西部であるが、そこでは情報が入手できないこと、場所が適当でないことが、他の地区より高くなっている。もう1つは駅西での興味が無いとい

う比率の高いこと、また、山間部での場所が適当でないの比率の高いことである。

居住年数の点からいうと、5年未満の層の人だけが情報入手を第一位としている。他の層ではいずれも時期・時間の比率がもっとも高い。30年以上の層では情報が入手できないという比率が19.8%と、他に比べてかなり低くなっているのが目だっている。(表-15)

最後に、充実を求める意見を見ることとしたい。どの地区でも公立施設がきわめて高い

表-15 居住年数別・非参加理由(市・公民館)

理由 居住年数	情報	時間・時期	開催場所	期待の ものがない	希望と 合わない	興味が ない	集団学習 好まない	その他
5年未満	31.6	28.4	21.1	26.3	14.7	4.2	8.4	12.6
5～10年	28.6	44.9	22.4	32.7	24.5	4.1	12.2	10.2
10～20年	31.5	39.6	21.6	27.0	16.2	3.6	13.5	12.6
20～30年	34.4	43.8	15.1	27.6	22.4	7.8	9.4	9.4
30年以上	19.8	40.0	22.0	30.2	20.0	6.5	16.7	10.4

表-16 居住地区別・充実への期待

	中 央	東 部	南 部	南 部 近 郊	西 部	港 周 辺	駅 西	北 部 近 郊	北 部	山 間	全 体
1. 公立の社会教育・文化施設の充実	58.5	63.6	59.1	65.7	58.1	59.6	58.8	65.0	56.8	59.7	61.2
2. 社会教育関係の専門職員の充実	7.7	11.4	11.2	11.4	9.2	9.0	7.9	11.5	8.6	16.8	10.5
3. 学習情報の提供や相談窓口の充実	21.7	24.6	23.2	30.9	29.0	22.7	28.1	23.9	30.2	23.5	25.8
4. 行政や公民館による講座の提供の充実	26.6	36.4	38.7	36.5	35.3	36.5	33.3	35.4	37.4	38.7	35.8
5. 既存施設間の連携でのサービスの充実	18.4	22.3	23.2	21.7	24.6	20.9	24.6	17.7	26.6	17.6	21.8
6. 公的事業よりも民間教育事業の振興を	9.2	9.1	13.1	10.6	14.3	11.6	11.4	10.6	12.2	12.6	11.3
7. 社会教育関係団体の自主活動の活発化	14.5	9.8	13.4	11.6	11.8	10.8	14.0	14.6	18.0	16.0	12.6
1. 図書館	38.0	32.5	34.6	37.6	34.2	26.1	32.8	29.3	34.6	23.9	33.0
2. 中央公民館	11.6	11.6	5.5	4.8	1.3	4.8	4.5	4.8	5.1	1.4	6.1
3. 地区公民館	27.3	34.3	35.0	33.9	38.6	40.6	40.3	40.1	37.2	46.5	36.4
4. 会館(観光会館・文化ホール等)	32.2	23.8	26.3	21.8	19.0	15.8	20.9	26.5	21.8	21.1	23.0
5. 研修施設(長町研修館等)	24.8	17.0	18.0	18.8	23.4	21.8	35.8	21.8	21.8	21.1	20.9
6. 宿泊研修施設(ふれあいの里等)	16.5	18.8	18.0	18.5	24.7	22.4	17.9	16.3	20.5	22.5	19.4
7. 体育施設	34.7	42.6	45.2	42.8	44.3	39.4	43.3	45.6	34.6	38.0	41.9
8. 美術館・博物館	23.1	29.2	24.0	23.6	18.4	20.0	9.0	17.7	26.9	21.1	22.6
9. 福祉関係施設	15.7	11.6	10.1	13.3	12.0	15.8	7.5	10.9	12.8	11.3	12.3
10. 学校開放施設(グランド等)	19.8	21.3	18.0	24.4	25.3	32.1	20.9	25.9	28.2	26.8	23.8

比率でトップにあげられていること、そして、公民館による講座の充実が第二位であることまで同様である。地区の間でのややこととなった傾向としては、山間部での専門職員の充実、南部近郊および北部の情報提供や相談窓口、北部の自主活動の活発化への比率が相対的に高いことが注目される。(表-16)

居住年数の点でも全体の傾向は同様であるが、情報提供・相談窓口の充実や、既存施設間の連携でのサービスの充実を求める声が、比較的居住年数の短い人のなかに多いようである。

公立施設の充実を求める声は、中央・南部・西部・駅西・北部近郊・北部では男の方が強く、東部・南部近郊では女の方が強いように見受けられる。残りの港および山間の2地区ではほぼ同じである。

具体的施設としては、中央地区の人が図書館を第一位にあげているほかは、ほとんどの地区で体育施設がトップになっている。中央地区で図書館の充実をもとめている人の比率は、男では46.4%であるのに対して女の場合は30.8%とかなり大きな差が見られる。体育施設については、東部地区では女の方が強くその充実を求めているが、南部・西部・北部近郊・山間の4地区では男の比率の方がかなり高い。

地区公民館の充実を求める声は中央がやや弱く山間部がやや強いといえるが、総対的には30~40%とかなりのものがある。この声はすべての地区で女の比率が高いが、中央・東部・西部・駅西・山間では特に男との間の差

が大きいものとなっている。(表-17)

(4) まとめ—生涯学習をめぐる金沢市民の意識の特長と、それへの対応—

これまで記してきたところから見いだされる特長の1つは、金沢市民の生涯学習に対する意識は決して低くはないが、実際の行動ということになると必ずしもそのままの姿で現われているとは限らない。この現象はどこでも見られるものではあるが、金沢市民の場合も例外ではないということであろう。そして、このギャップは男のほうが大きいように見えるが、労働に拘束されることの大きいことを示しているものと思われる。少なくとも調査結果の上からでは、相対的には、女性よりも強い男性の学習意欲に因應するための幅広い対応策が検討されなければならないであろう。

第2にあげたいことは、学習内容に関連してのことである。男性の場合は職業・趣味・スポーツがほぼ均等に学習されているのに対して、女性の場合は圧倒的に趣味の学習に比重がかかっている。このことは女性の場合にカルチャーセンターでの学習が、男性の2倍以上であることと対応しているものと見ることができよう。

このような全体的な現象はそれとして、学習内容というのは年齢、職業をはじめとしてさまざまな要素により、多様な選択がなされるものである。どの層が、どのような内容の学習を必要としているのかを的確に把握することが、なににもまして重要であることを

表-17 居住地区別・充実期待感

施設	中 央		東 部		南 部		南部近郊		西 部		港周辺		駅 部		北部近郊		北 部		山 間		全 体	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
公立の施設	61.5	56.0	62.4	64.4	60.4	58.3	63.7	67.2	59.8	56.6	59.8	59.3	59.6	58.2	70.0	61.1	64.3	51.8	59.6	59.7	62.2	60.5
地区公民館	17.9	35.4	25.4	40.9	30.0	38.6	33.0	34.6	31.6	45.1	38.0	43.0	28.6	48.7	37.1	42.9	36.1	38.1	38.2	54.1	31.2	40.6
体育施設	35.7	33.8	38.1	45.9	53.3	39.4	41.7	43.6	50.0	39.0	40.5	38.4	46.4	41.0	54.3	37.7	33.3	35.7	44.1	32.4	44.0	40.2

理解すべきであろう。

第3番目にあげたいことは、公的社会教育とのふれかたの問題がある。そこに学習の場をもとめた人は、1年の間になんらかの学習をした人の約25%であった。この数字が高いか低いかは、いちがいに言い難いが、問題として指摘しておきたいのは、性別および年齢との関連においてである。すなわち、男性は20%弱、女性は30%弱という数字に表われているように、男性が公的社会教育の場に参加することが少ないという定説(?)が裏づけられている。その理由としては、時間的なことが大きいと思われがちであるが、調査の結果では必ずしもそうではない。(これを理由とするのは女性42.0%に対して男性36.6%である。)内容面で期待や希望に合わないこと、情報が入手できないことを理由とする比率は女性を上まわっている。また行政の講座には興味がないとか、集団学習は好きでないとする人も男性のほうに多いことにも注目すべきであろう。

もう1つの年齢の側面を見てみよう。前記した如く、全体の平均は25%ほどであるが20才代、30才代、40才代ではその比率を下回っており、50才代の27.9%になって初めてそれを上回るようになってきている。しかし、男性だけの場合でいうと平均を上回るには60才代になってからである。つまり公的社会教育に学習の場を求める人は、年齢がさがればさがるほど少なくなるという現象がみとめられるようである。若者がなぜそこを避けるのかの徹底的な究明が求められるのではないだろうか。

この調査の結果から若干の手がかりを拾い出してみることにしよう。かなり顕著な要因といえそうなことは、情報の到達度の問題である。(講座開設の)情報が入手できないを理由としてあげた人の比率(本文・第5表)に一つの鍵がひそんでいるように思われる。この点については男女のあいだにほとんど差は認められないが、時間・時期・場所という点

は女性にとって大きな要素であり、男性には内容が大きく影響しているようである。また、他の年代の場合以上にとくに20才代と30才代の男性の場合には集団学習は好きでないという割合が女性よりもかなり高いことが目立っている。

公的社会教育に関連して、最後にもう1つだけ触れておきたい。それは満足度の問題である。市・公民館開催の講座・教室に参加した人のなかで、何らかの意味で不満感を抱いた人が18.1%いる。60才代の22.4%が最高の比率であるが、年代による差はそれほど大きくはない。いろいろの事情をのりこえて、期待を持って参加した人の約2割がかならずしも満足しなかったということは、無視できないのではないだろうか。

ここまで、第一次の報告書を補足する形で金沢市民の生涯学習にかかわる意識を、調査結果の分析をとうして考察したわけである。「生涯学習振興法」の成立も見た現在、いよいよ、市民の生涯学習をサポートする体制づくりの本格化がせまられているといえよう。そのような状況のなかで、とりあえず現時点では、中核的な役割を担うべきものといえる公的社会教育が、真にその役割の担い手になりうるか否かは、これまで指摘したことを含めた多くの問題点をどれほど克服できるかにかかっているものといえよう。

別に言えば、過去と未来の中間点である1990年の今現在、人々が必要としている学習とはどのようなものなのか、そしてそれはなんのためなのかを、きちんと把握することが必要だということである。その上に、どこが、どのような形で、その必要に応えることが望ましいのかが検討されるべきであろう。そして、そのなかで、公的社会教育はなにができるのか、しなければいけないのかを問い直さなければならないのである。

(平成2年10月15日受理)